

社会人のプレゼンテーションにおける
聴衆への意識：
グローバル社会の要請に応える大学英語
プレゼンテーション教育を目指して

田村朋子（立教大学）

野村佑子（立教大学）

1. 本研究の背景

<日本の大学でのプレゼンテーション教育の
問題点>

問題点 1 : 授業での観察から

- 不自然なプレゼンテーション（英語式に過剰に
適応？カジュアル？）
- 内容が充実していない（事実の列挙のみ）
- Persuasive / Opinion presentationができない

事例 1

Opinion: Many people check the social media when they shop.

Backup 1: Influence of the review site (グラフを引用しレビューの読者数が多いことを提示)

Backup 2: Means of gathering information (グラフを引用しSNSのほうがYahoo!やGoogleよりも多く利用されていることを提示)

Backup 3: Sharing your word of mouth (SNSで簡単に口コミを利用できることを説明)

=> Opinion とBackupではなく、Topic とdetailsというinformative presentationになっている。

事例 2

Opinion: People should know history and development of movie to more enjoy seeing movies. (to enjoy watching movies moreの意)

Backup 1: Technique (movie) 映像の技術が発展した。

Backup 2: Technique (theater) 映画館の設備が発展した。

Backup 3: Commerce 様々な媒体で広告し、興行収入を得ている。

Backup 4: Influence 社会現象を引き起こしている。

Opinionで、映画の歴史と発展を知るべきと主張し、なぜ知るべきなのかを説明するのではなく、知るべき内容を説明している＝backupになっていない。

1. 本研究の背景

問題点 2 : テキスト分析から(田村他2014)

- 内容充実のための思考形成、聴衆分析を扱うことが少ない。

図1 プレゼンテーションのプロセスと必要な能力およびスキル

情報整理力・思考形成力

Step 1

テーマ決定

Step 2

調査・情報収集

着目点認定

Step 3

プレゼンテーショ

ントピックの決定

プレゼンテーション・スキル

Step 4

プレゼンテーション

準備 (視覚資料作成等)

Step 5

プレゼンテーション

1. 本研究の背景

<問題点 1・2から発する疑問点>

=> 非英語ネイティブである日本人学習者に授業を通して経験させる英語プレゼンテーションはこれでいいのか？

- 聴衆への意識の必要性？
- 内容充実のための思考形成にも着目？

1.本研究の背景

<学生が授業を通して学ぶべきこととは？>

- 「日本人としてのアイデンティティを持ちながら、(略)異なる言語、文化、価値観を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力」（「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」(2011)）の必要性

=> 様々な言語を母語とする人々とのコミュニケーションに有効なEIL(English as an International Language)としての英語運用能力

EILとは：「国際コミュニケーションのために用いられているときの英語」（日野2008）

Ex.

英語ネイティブ vs 英語ネイティブの会話

≠EILを用いていない会話

朝鮮語ネイティブ vs 日本語ネイティブの英語

= EILを用いた会話

=>英語ネイティブが使う英語ではない

自己文化や個性を表現する英語

深いレベルでの相互理解のための英語

（日野 2003）

2. 本研究の目的

- 英語プレゼンテーションにおいて、どのように聴衆を意識して、準備・実践するべきかを明らかにし、これを大学の英語プレゼンテーションの授業に取り込む方法を提案する。

3. 方法

- 時期 2015年8月～2016年2月
- インタビューイ : 35歳～70歳の会社員(4名)
- 合計時間 : およそ5時間53分
- インタビュー項目 (英語力、プレゼン経験など)
- インタビューを書起し、聴衆への意識について語っている箇所を抽出し (86ヶ所)、KJ法 (川喜田1986)で分析を行う。

インタビュー項目例

(英語プレゼンテーション経験について)

- 英語プレゼンテーションの目的・オーディエンスの種類や人数など
- 英語プレゼンテーションの準備方法
- 英語プレゼンテーションに対する意識
(特に気を付けていることなど)

kJ法の特徴 (川喜田1986,田中2012を参照)

手順

1. ラベル (カード) 作り (1 ラベルにつき、1 メッセージとする)
 2. ラベル拡げ
 3. ラベル集め
 4. 表札作り
(2~4 を繰り返す、可能な限りまとめる)
 5. 空間配置、図解化
 6. 文章化
- 既成概念にとらわれずに分析し、新しい知見を生み出す発想法
 - 質的研究 (仮説生成型、一般化は目指さない)

3. 方法

1. ラベル作り（インタビューの書起しから聴衆への意識について言及している発言・それに関するやりとりを抽出しラベルに貼付ける）
2. ラベルのグループ編成（ラベル広げ、ラベル集め、表札作り）
3. 図解化・文章化（ラベル同士の関係性を検討する）

=>これにより、インタビュイが聴衆に何を求め、それを実現するためどのようにプレゼンテーションを行ったのかを明らかにする



図 日本人ビジネスマンの英語プレゼンテーション における聴取への意識

—————
関係が深い

—————→
因果関係

4.分析結果 (例)

①	英語の正確さよりもありのままを伝えよう	い	伝えるためにはしよう言語より大事なことがある	f	英語を気にするより自分のペースを保った方が内容の共有ができる
				61	技術の話。で、えー、例えばその技術の中でこういう新しいことやったよとか、えー、こういう経験したんで皆さんこういうところを注意してくださいねというようなプレゼンが多いので。だから、最終的な価値観は皆共有してる場合が多いんですね、私の場合はね。なので、えー、その一般の人、英語でプレゼンする場合はね、外国人とか、え、英語でやる場合はあんまりそれが、価値観はどうだろうか、このオーディエンスによって価値観が違うんじゃないかとかいうふうな感じはしなかったね。
		く	主観抜きでありのままを伝えることが大事	h	視覚情報を提示して伝えたいイメージを正確に伝える
				m	専門家に真意が伝わるように用語の使用に気を配る

4. 分析結果

- ① 英語の正確さよりもありのままの情報を伝えよう
- ② 聴衆を自分の側に上手く引き入れよう
- ③ 聴衆と同等な関係を築きたい

4.分析結果

日本人のプレゼンターの英語でのプレゼンテーションにおける聴衆への意識

目標：聴衆と同等な関係を築きたい&そのために聴衆が違和感を感じずにこちらに乗ってきてほしい

方法：視覚情報の提示・専門用語の使用に留意
=>英語の正確さより、客観的な情報提供に徹しありのままに伝えることを重視

大学英語プレゼンテーション教育への応用

- ① 英語の正確さよりもありのままを伝えよう
-> 聴衆と情報を共有するには客観的な視点が大切

Ex. 効果的なvisual aidsの選定と、示すタイミングに関する指導を行う。出来る限り、自分で作成したもの（写真等）を使用するよう促す。

大学英語プレゼンテーション教育への応用

②聴衆を自分側に上手く引き入れよう

->プレゼン内容を知らない聴衆に対する配慮の強化

- Physical elementsの意味再確認
- 聴衆の理解をサポートする意識

Ex. ジェスチャーや間の取り方、動き（歩く、止まる）などについて、聴衆に理解してもらうために必要なphysical messageの使用を指導する。

大学英語プレゼンテーション教育への応用

③ 聴衆と同等な関係を築きたい

-> 同じプラットホームに立つために、事前に聴衆分析を行う必要性

Ex. 聴衆のニーズ、聴衆が置かれている状況、聴衆にとっての理解のしやすさなどについても考えるよう指導する。

大学英語プレゼンテーション教育への応用 聴衆への意識を強化するためのアイデア（例）

- 聴衆側のプレゼンを聞く目的も考える指導
 - ×Opinion /informative などの型だけ
 - Opinion /informative + 聴衆の最終目標設定

Ex.準備(Brainstorming/outlining)のステップ

I want my audience to ~~を考える

実践(introduction)

Here I would like to share the goal of this presentation with you. The goal is ~~ などの表現を使う

ご清聴ありがとうございました。

本研究は、「グローバル人材育成のための
大学英語プレゼンテーション教育の学際的
研究」（平成27～29年度 挑戦的萌芽研究
15K1291代表者 田村朋子）のもとで行われ
ている。

参照文献

日野信行(2003). 「国際英語」研究の体系化に向けて—日本の英語教育の視点から— 『アジア英語研究』 第5号

日野信行 (2008). 「国際英語」 『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』 松柏社

川喜田二郎 (1986). 『KJ法-混沌をして語らしめる』 中央公論社

産学連携によるグローバル人材育成推進会議(2011) 「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」

田中博晃(2012). 「KJ法入門 発想や仮説を得るには」 『外国語教育研究ハンドブック—研究手法のより良い理解のために』 松柏社